

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2671500102		
法人名	社会福祉法人 長生園 (たんぼぼ)		
事業所名	グループホーム 幸せの里		
所在地	京都府南丹市園部町上木崎町坪ノ内19番地		
自己評価作成日	平成28年1月12日	評価結果市町村受理日	平成28年3月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/26/index.php?action=kouhyou_pref_search_list_list=true&PrefCd=26
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83-1「ひとまち交流館 京都」1階
訪問調査日	平成28年1月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

2ユニット合計18名の利用者が、2棟ある木造平屋建ての建物にて共同生活を行っている。各棟食堂及びリビングは吹き抜けで開放感に満ちた構造で、テラスや芝生の庭、家庭菜園を設け、利用者は敷地内を自由に行き来し、くつろげるよう環境を整備している。行事やレクリエーションの際にはユニットの枠を超え全員で楽しめるよう企画・立案・工夫している。法人内には診療所や特養を併設しており、ホーム担当の看護師がバイタルチェックや健康相談、受診へのアプローチなど、医療面でのフォローも充実している。又、併設の特養とも連携を図りながら、緊急時などの対応も協力体制にある。万が一、グループホームでの生活が困難となった場合、特養への対応も検討可能である。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホーム幸せの里(以下ホーム)は、創設60年を迎える各種高齢者施設、診療所が併設された法人により運営されている。施設間連携もあり、介護状況によっては特養等の利用の検討もされ、利用者・家族の先々の暮らしの安心に繋がっている。診療所へは職員と共に車いすや徒歩で、喋りながら受診に向かえる距離にある。道中、ケアハウスもあり、言葉进行交流し、もちろんケアハウスに住んでいた利用者もある。併設施設の趣味クラブに参加したり、大きな法人故の強みを生かした交流機会がある。地域へは少し車を走らせると、馴染みの氏神社やスーパーマーケット、「障害者のカフェ」があり、知人に出会う楽しみもある。ホーム内は、高い天井、太い大黒柱、梁が印象的であるが、湿度を確保するために、室内の一部を占拠している洗濯物やシーツから生活感が滲み出ている。食事は大きなテーブルを皆で囲み郷土料理など屈託のない会話が交わされ大笑いし、陽気である。この明るさは家族からも評価され、ホームへの信頼関係に繋がっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「和み」「尊厳」「安心」の基本理念のワードから「和み」をピックアップし、“笑顔のある環境づくり”を本年度の重点目標とし、1日1回利用者と職員が共に、顔のエクササイズである笑顔体操を実践している。	今年度の重点目標“笑顔のある環境づくり”は管理者が受講した研修からヒントを得て職員に提案し合意を得て実行した。認知症の人にとっての表情の意味を共通理解し、「笑顔のマニュアル」を設け、評価・実践・再評価のステップに沿って「笑顔トレーニング」に取り組み、「和み」の提供に努めている。家族から「笑顔が沢山見られる」等の声が届いている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の祭りや行事の参加、小・中学校の体験学習などの受入れにて、交流を深めている。	立地上、ホームは法人施設の奥に位置し、近隣との交流がしにくい場所ではあるが、運営推進委員や職員から地域の情報を得て、地元の神社の祭・初詣、近くに障害者の喫茶店もあり、出かけることも多い。新しい店ができると出かけ、馴染みの知人に出会う機会にもなっている。地域の小学・中学生との交流や「勤労体験」での来訪もあり、利用者は孫に囲まれたように満面の笑顔で楽しんでいる。施設長にも介護家族の会から講師依頼があり、双方向の地域交流が出来ている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	本年度は、管理者が南丹市の「認知症ケアパス作成委員会」の委員として、活動している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	本年度は新たな試みとして、定例の委員会以外に毎年実施している家族交流会に委員を招待し、実際に利用者や家族と関わって頂く事で、ホームの状況をより把握して頂き、意見交換のきっかけづくりを行った。	会議では、利用者の現状・利用状況・行事等報告・業務の現状・今後の予定について報告され、委員との意見交換がなされている。議事録は家族にも送られ、その都度次回の参加案内をしているが、参加者は限られている。一方事業所も参加委員に家族交流会に招く等をし、現場の情報の提供への工夫もされている。	現在のメンバーに加え、地域で福祉活動や特技を持たれている団体等の参加を期待したい。出席された家族からは、いろいろな意見が聞け参考になったとの声もあり、日程・時間帯等の検討も望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	制度面の情報収集や困りごとなどは、市の担当者と常に連絡をとり合い、アドバイスや資料の提供を受けている。	メールや電話でやり取りし日頃から信頼関係の構築に努めている。訪問時には事前に約束をし、相談する時間が持てるようにしている。担当者は解らないことは調べてコピー等が送られている。	

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぽぽ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に1度はホーム内にて研修を行っており、職員間で啓発し合っている。又、原則夜間帯以外は門扉や玄関、勝手口等はオープンにしている。	施錠をせず、夜間のみ外の門扉を閉じている。開けて出ていく方もあるが無理に止めずに落ち着かれるまで職員が後ろについて歩くようにしている。基本的に施設内は自由に歩かれるため、十分な見守りをしていても転倒のリスクがあることを家族に伝え、できるだけ自由を拘束しない支援をしている。マニュアルが整備され、研修も実施されている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年間研修計画により法律などを確認し、日常に行われている介護の状況を検証し、虐待に対しての意識付けをしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ホーム利用者の中には、成年後見制度を利用している利用者があり、ぱあとなあやリーガルサポートなどのリーフレットを参考に、周知している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	事前に口頭での説明や、例などを挙げた資料などを作成し、それらを交え説明も行っており、その都度質問などを聞いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	直接相談して頂く事が多いが、ホームの玄関口には意見箱を設置し、苦情の申し立てについては第三者委員を外部に設けている。相談があれば、職員会議やミーティング等で議題とし、職員間で情報の共有や対応方法を協議している。	面会は週1回から月3回程度あり、中には定期的に家族と自宅に戻る利用者もある。面会が多いため家族から希望や要望を聞く機会は日常的に持っている。年に一度家族会も開催され、茶話会形式でお茶とケーキ・焼肉など和やかに行われている。評価調査におけるアンケート回答率も89%と高く、ケアや運営に面に向きな回答が多い。	家族とは友好関係にあるが、利用者を共に支える者同士、年1回実践の確認をする意味でアンケートをとり、実践の振り返りに活かされてはいかがでしょう。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度の定例の職員会議では意見交換をしている。又、必要な案件ではアンケートを実施し、意見の集約・協議し、反映させている。	月1回の職員会議は案件によっては職員にアンケートをとり、意見を集約している。職員間に年齢差はあるが、高齢者は介護の現場経験が豊富である。ケアに関する経験値と科学的根拠とのやり取りは年齢等の隔たりなく意見交換が出来ていると受け止めている。ユニットでの職員配置については、管理者が職員アンケートを取り、現場の意見を尊重し決定した例もある。年1回職員全員に個別面談し、意向等を聞いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課を採用し、評価に繋げている。又、職員の得意分野での活躍を後押しし、やりがいのある就業をサポートしている。		

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぼぼ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護実践者研修への受講支援や、内部・外部共に必要と思われる研修などには受講出来るように支援している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が近隣の小規模多機能ホームの運営推進委員として会議に出席し、互いに情報の交換や地域資源の発掘・活用などを行っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用契約前には、自宅等へ面接へ行き、利用者と顔合わせをし、本人の意向や思いを聞き出しながら、環境面や生活習慣など情報収集し、関係づくりの一步としての関わりを持てるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談の段階から、利用契約が確定するまでの間に、利用者の状態や介護においての不安や困りごと、どんな介護を望んでいるかなどを聞き、家族のニーズを引き出せるように関わりを持っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	例えば、病院の受診を希望している利用者であれば、併設の診療所の医師や看護師と相談し、必要に応じて専門医の受診が出来るように調整を図ったり、可能な限り対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と職員は、食事づくり・洗濯・掃除等の家事はもちろん、食事や余暇活動などにおいても一緒に行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	外出などの支援や病院の受診の際には、家族に協力して頂き、付添いなどをお願いしている。家族の中には、食事づくりを手伝って下さったり、手調理を振る舞って下さる方もいる。		

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぽぽ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職場の元同僚などが面会に来られる際、予め本人の体調や予定の有無などを伺い、日時を調整するなど、職員が間に入り関係の継続に努めている。	自宅や娘の職場に遊びに行き、お茶を飲んでこられる方もある。併設のケアハウスが主催する月二回の喫茶サロンに行き、顔見知りの方とおしゃべりし戻って来られる利用者もある。以前ケアハウスに住んでいた利用者には懐かしい場所である。馴染みの人の訪問は少ないが、どこにも出かけたくない利用者もあり、それぞれの意向に合わせ支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	例えば食事の際、利用者のテーブル席の間に職員が座り、会話の橋渡しをしたり、集団レクを行う場合には、利用者個々の機能に合わせ支援し、みんなで輪になれるように配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された方であっても、必要に応じてホームでの情報を求められれば、同意を得た上で提供している。又、家族と出会った際には必ず声をかけ、会話をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	訴えの出来る方は、希望や意向を聞いた時点で付箋に書き出し、職員室の掲示板に貼り、職員間で把握した上で、実施に繋げている。訴えの出来ない方に関しては、本人が元気な頃にどんな希望があったか家族等に聞き出しそれらの情報を元に検討している。	初回のアセスメントで本人の生活歴を詳しく聞き取っている。その人の嗜好も聞きっぱなしにせず、たとえば麦ごはんが好きで日常的に食べていた方には施設で用意した白米だけでなく、レトルトの麦ごはんを用意し、喜ばれたりもしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用が決定すれば、事前面接を行い、可能な限りご本人の自宅へ赴き生活歴や暮らしぶりなどの情報収集を行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々のADLや認知症の程度などを鑑み、可能な限り本人の出来る動作を引き出せるような支援を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	例えば、本人の要望などを聞けば、その時点で付箋に記入し職員室にある掲示板に貼り出し、サービス担当者会議やケース会議にて討議し、可能な範囲でプランに組み入れ、経過については月に1度のケース会議にて確認している。	初回の面接で本人や家族、関係機関から聞き取った詳しい情報をもとに暫定プランをたて、三ヶ月の間に職員が気づいた事・本人の要望など付箋に随時書き、掲示板に貼り、情報を共有している。ケース会議で検討し、必要に応じ、プランの変更もしている。その上でサービス担当者会議を開き、家族も参加しプランを確定している。	

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぼぼ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録に記し重要度の高い情報は、併せて職員の連絡帳に記入している。プランの内容においては、モニタリングを兼ねたケース会議にて評価している、		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ギャッジアップの出来るベッドが必要であれば、併設の特養部で借りたり、一時的に機械浴での入浴が必要な利用者がある場合は、特養で入浴をしに行くなど、柔軟な対応をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の飲食店や商店に出かける時には事前に連絡し、注文やレジでの支払いが円滑に出来るよう配慮や理解、協力が得られるようお願いしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	同法人に併設している診療所を中心に入居前のかかりつけ医や専門医への受診支援や情報の共有の為に連絡調整を行っている。	法人は「わかがえり園」という診療所を持ち、ほとんどの医療は当園で対応している。歯科・眼科・耳鼻科等専門医療は職員が通院介助をしている。通院時に家族も来られることもあるが、職員は家族に任せ帰ることなく、順番を待つ間は、利用者・家族・職員の懇談の機会に活かしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設特養の看護師を1名グループホームの担当看護師として配置し、健康管理や受診調整を担って頂いている。又、担当看護師他が、月に1度は利用者全員を対象にバイタルチェックや健康相談をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	併設診療所を介し、協力医療機関の地域連携室MSWと調整を図りながら、本人・家族等の意思を交え、協議出来る様に連絡調整し、担当医など関係者と共にカンファレンスを行う事もある。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態の変化があった際や、家族より相談を受けた場合、意向に基づき併設特養への利用に向けて調整したり、病院での対応など、各専門職や関係機関と協議しながら調整している。	「看取り介護の指針」が設けられ、入所時及び必要な時期が到来した折りに説明し、家族から同意書を取るようになってきている。現在まで施設での看取りはないが、指針には具体的な支援の方法が記載され、併設の特養からベッド、特殊浴槽を借りることも約束されている。看取りに向けては利用者の状況変化を書面にしっかり残すようにしている。本人がどう感じるかに重点を置き支援していく方針である。	

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぽぽ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	担当看護師などから、急変時の症状や対応を指導されている。利用者個々の既往や状態に応じたアドバイスもある。又、緊急時の対応マニュアルも整備している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練や、非常通報装置の使用方法を職員研修の一環でレクチャーしている。有事の場合医は同法人内の事業所が一丸となり対応が可能。又、消防署とはホットラインで繋がっている。	合同避難訓練は夜間対応で行われ、自衛消防団とも協力体制がとれている。併設の特養が二回水害に合っているため法人全体で災害対策には力を入れている。出入り業者の協力も得ることができている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者個々の性格や機嫌などを加味し対応している。個人的な話をする際には居室内で話すなど、他の利用者との関係などにも配慮した対応を心がけている。	「尊厳」は理念の一つであり、職員は繰り返し学び、日々意識して支援にあたっている。その年のテーマとして選ばれると、掘り下げてネット等で調べ、実践に繋げるよう研修でも学習している。日々の支援では飲み物も好きなものを選択できるように、定位置に終日ポットとコーヒー等を置き一人ひとりの要求に配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	基本的に利用者の意思を普段より尊重している。認知症により判断が出来ない方については、家族などより本人の好みや意向を聞き取り、支援の参考にしてている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事の時間や決められた日課については、その都度案内しているが、本人の希望やペースを尊重し、無理強いをしないように心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪型や服装については、本人の好みに合わせて対応している。衣類についても、毎日自分の選んだ服を着て頂いている。中には、行きつけの美容院へ行く人もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理・盛付け・準備・後片づけに至るまで、可能な限り利用者を交えながら行っている。	調理に半数以上の利用者が参加されている。男性も大根おろしや山芋すりを手伝っている。芋は芋植えから芋ほりまで参加し、自分たちで収穫し食している。おやつ作りではホットケーキミックスを使ったお菓子やドーナツ、肉まんなど皆で作っている。職員も同じものを一緒に食べながら会話を楽しんでいる。利用者の調理姿を家族が見て感動し涙される場合もある。	

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぽぽ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	特養の管理栄養士からの助言を得て、個々の摂取状況や栄養状態に応じて対応している。水分については、ティタイムを設けたり、水筒にお茶を入れて居室へ持ち帰る方もあり、支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアが自分で出来る方は、声かけや確認をし、出来ない方はその方の状態に応じて介助している。又、口臭の酷い方に対しては、口洗液を使用しうがいをして頂いている。必要に応じ、歯科受診の支援も行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	例えば、紙おむつや尿とりパッドを使用している方であっても、定時・随時(本人の排泄状況に応じ)トイレへの声かけや誘導を行い、汚染が少しでもないよう支援を行っている。	排泄チェック表を用いて定時に声掛け誘導し、パターンを把握している。リハビリパンツから布パンツにレベルアップされた方もおられる。利用者によっては夜間のみポータブルトイレを置いている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	極力下剤には頼らず体操を推奨したり、水分をなるべく多く飲んで頂いている。現在対象者はないが、個別にヨーグルトを食べたり、オリゴ糖を飲み物に入れて対応している方もあった。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員の勤務の都合上、夜間の入浴は無理であるが、午前・午後入浴のタイミングを尋ねたり、入るか・入らないかも選択できるように声かけをしている。季節に応じて例えば冬至にはゆず風呂をしたりもしている。	入浴は週に二回以上、午前、午後その方の希望を聞き提供している。お湯は毎回入れかえ、ゆず湯やしょうぶ湯などの季節湯を楽しまれている。入浴後は肌の乾燥防止にりんご酢の希釈液をつけている。(ハーブビネガー療法)利用者全員で保湿剤も購入してもらい、使用して効果を得ている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	エアコンでの室温調整や、明るさの調整、布団の形状など本人に応じて対応している。眠れない方に関しては、リビングなどでテレビを一緒に観たり会話を交えながらお茶を飲むなどの対応もしている。又、Drと相談し眠剤の処方等も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	殆どの利用者が服薬・保管管理が出来ない為、介護者が代行しているが、服用の際には本人が疑問に思われる事に対して説明はしている。		

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぽぽ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や特技、得手・不得手に応じ、レク活動やクラブ活動、軽作業や外出に至るまで本人の状態に合わせて対応し、支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や買い物・外食など、個々の希望に応じ支援している。個別に対応が不可な場合は家族の協力を得ている。又、外出先等でスムーズな対応が出来るように、行き先の店や施設に事前連絡し、店員などの協力を得たり場所の確保もお願いし、職員で下見にも行っている。	施設は奥まったところにあり公道まで出るには距離があるが、ホームの周囲を散策し、月に2回は近所のコンビニエンスストアや神社に歩い、スーパーやホームセンターには車で出かけている。窓から鹿を見かけることもある自然豊かな場所にホームはあり、入居者は玄関の落葉拾いをしたり、芝生のウッドデッキでおやつを食べたり、広い敷地内でのんびり過ごされている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物などの際には、自分で支払いが可能な方に関しては、レジの際、お金を渡し、支払いをして頂いている。出来ない方については、商品の値段などを説明しながら、支払いを代行している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたい利用者は、希望があればホームの電話を使用して頂いている。手紙の支援は暑中見舞いや年賀状を、個々の状態に応じ支援をしながら作成し、家族や友人などに送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内は毎日掃除をし、清潔を保っている。又、四季折々の花や植物、季節に応じた飾りやしつらえで、和めるように環境整備に努めている。時には、ヒーリング系のBGMを流し、心地よい空間を演出している。	リビングは広く日当たりもよく明るい。天井が高く、ファンが設けられている。梁と大黒柱、大きな窓を配し、壁等の木のぬくもりと開放感が心地良い。中央の大きなテーブルを囲んで利用者、職員が一堂に会することができる。テーブルは用途に応じて四つに分割できる。床暖房、加湿器等で快適に室内が調整されている。梁に物干し棹をセットし、利用者が自分でパジャマを干されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	好きな時に好きな場所で過ごして頂いている。利用者同志、自然と会話の輪が出来る事が多いので、特に職員が介入しなくてもよいが、トラブルなどに発展しそうな場合には間に入り、解決に向け支援を行っている。		

京都府 グループホーム 幸せの里 (たんぽぽ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者各々が、自宅から持ちこんだ調度品や家具に囲まれ暮らしている。躓いたり事故のもととなりうるものに関しては、本人や家族とも相談し、片付けたり、入り替えをするなど、事故防止に努めている。	居室の入り口には手前から各自の居室が判るように立体的な表札がかけられている。居室には畳敷きのベッド、クローゼット、エアコンが用意されている。家からラック、整理ダンス等持ち込んでいる方もいる。カレンダー、時計、写真、家庭で使っていたテレビ等思い思いの好みの物が持ち込まれている。カーテンは用意されているが希望があれば自分で交換可能である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒や怪我などの要因になるものに関しては、配置方法を考えたり撤去するなど対応をしている。又、歩行が不安定な利用者の食堂でのテーブル席は、極力居室に近い場所を設定するなどの工夫もしている。		